

Title	荻生徂徠『訳文筌蹄』における「俗語」受容
Author(s)	張, 茜
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2020, 54, p. 1-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91386
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

荻生徂徠『訳文筌蹄』における「俗語」受容

張 茜

キーワード…荻生徂徠／『訳文筌蹄』／唐話／『明律国字解』

1 課題・方法・資料

一六世紀末から一七世紀にかけて、日本には、中国・朝鮮から多くの書物が流入するとともに、明清交替にともなう亡命や黄檗僧の渡来というかたちで、多くの中国知識人が来日した。その影響もあって、江戸時代中期には、学者たちのあいだで、同時代の中国に対する関心、とりわけ同時代の中国語に対する関心が高まり、岡島冠山（一六七四～一七二八）ら唐話に通じた人々の東行は、さらにこの関心を高めた。この点について、奥村佳代子は、「当時の学者は、新しい中国書籍を読むために、その言葉を是非とも理解する必要があった。学者や知識人の間で、唐話を学ぼうという気運は高まる一方だった」⁽¹⁾指摘している。この時期、唐話学の興隆、唐話学習熱の高揚という風潮が生まれたのである。この風潮のなかには、好學で知られる五代將軍徳川綱吉とその重臣柳沢吉保、さらには柳沢家の儒臣た

ちも含まれていた。

このようななかで、唐話知識の必要性を最も強く唱えたのは、当時柳沢吉保の儒臣であった荻生徂徠（一六六六—一七二八）である。徂徠は、最初に唐話を学んだ儒者であると言ってもよいくらい早い時期から唐話への関心を示した。⁽³⁾ 石崎又造は、「従来西陲の一隅に限られていた唐話学は徂徠の如き偉大な学者の賛同と長崎出身の冠山及大潮等の指導を得て始めて学界の注目する所となった」と述べている。⁽⁴⁾ のちに徂徠は古文辞学を確立するが、その前提として、唐話の学習があったのである。⁽⁵⁾ 『六論衍義』に訓点を施したり、明律の研究をして『明律国字解』を著したりするうえでも、唐話の知識は重要であった。⁽⁶⁾

詳しくは後述するが、荻生徂徠は、比較的早い時期に、『訳文筌蹄』という書物を著し刊行している。『訳文筌蹄』とは、同訓の漢字の意味の違いをはっきりさせることを目的とした字書であり、近世中期以降、広く利用された。この字書の特徴の一つは、「俗語ニ…」というかたちで、唐話の知識が織り込まれていることである。本稿が分析の対象とするのは、この特徴的な叙述である。本稿は、この特徴的な叙述の例を網羅的に集め、分析することで、荻生徂徠における唐話の知識の由来と理解の程度を明らかにするとともに、それが徂徠学成立以後に果たした役割を明らかにすることを課題とする。

近世まで、中国語を理解する主な手段として古くから伝えられ、広く受け入れられていたのが、訓読である。そして、そのような訓読に疑問を持ち、「崎陽之学」⁽⁷⁾を主張したのが、荻生徂徠である。ここで先行研究に検討を加えておくと、徂徠の唐話に対する態度に関して、六角恒広は、原双桂（一七一八—一七六七）の唐話の稽古に見られる「古今ノ変、雅俗ノ別ヲ弁知シ、得失ヲ正シ、是非ヲ明カニシテ其本来真面目ノ正音ノミヲ操」⁽⁸⁾る音韻研究と比較して、「徂徠の唐話観は、儒者の立場から、唐話を一種の余技とみなしている点にあって、この原双桂のような真剣さ

は見られない⁽⁹⁾と指摘している。これに対して武内真弓は、徂徠の唐語学習は人生のかんりの期間を割いて取り組まれており、「余技」にとどまらず「中国の古典の研究に利用しようという目的」があったとしている⁽¹⁰⁾。本稿の立場はどちらかといえば武内に近いが、本稿で分析対象とする「俗語」の引用例から見ると、徂徠が「中国の古典の研究に利用しようという目的」を超えて、当時の現代中国語に幅広い関心を持っていたことは疑いない。

本稿で取り上げる『訳文筌蹄』は、徂徠の言語観の反映された著作として、日本においても中国においても、しばしば取り上げられてきた⁽¹¹⁾。ここでは、徂徠の訓読否定論や華音直説論が繰り返し論じられている一方、徂徠が当時の現代中国語（唐語）について持っていた知識に関しては、具体的には分析されていない。つまり、徂徠が「崎陽の学」を唱えたこと自体は広く知られているものの、徂徠の唐語に関する知識自体はいまもって十分には分析されていないのである。そこで、本稿では、従来注目されることの少なかった、「俗語二：」というかたちで『訳文筌蹄』に書き込まれている唐語に関する具体的な知識を分析することによって、徂徠における唐語の知識の由来と理解の程度を明らかにしたい。

ところで、国会図書館には、『訳文筌蹄』の写本（通称「国会本」）が所蔵されている⁽¹²⁾。この国会本は、徂徠が二五、六歳頃に行った講義を、塾生の吉田有隣と僧天教が筆録したものであると考えられている。のちに『訳文筌蹄』初編に収められた「題言十則」において徂徠自身が「是の編：蒙生伝写して、脛無きに千里の外に走る」と述べているように、『訳文筌蹄』はすでに写本の段階で広く読まれていた。その後、国会本の巻六巻七と巻十巻十一に当たる部分を修正補充し、「訳準一則」「題言十則」「凡例三則」を新たに加え、一七二四（正徳四）年から一七二五年にかけて刊行したのが、本稿で扱う『訳文筌蹄』初編である。ここで、本稿の注目する「俗語」の引用例について、国会本と版本を比較してみると、版本のほうがはるかに充実した内容になっていることがわかる。つまり、版本には、長期間

にわたる徂徠の唐話学習の成果が反映されているのである。そこで、本稿では、国会本ではなく、版本（『訳文筌蹄』初編）を主な分析の対象とする。ちなみに、一七九六（寛政八）年に刊行された『訳文筌蹄』後編三卷三冊も存在するが、これは徂徠の遺稿をもとに後人が増補修正を加えたもので、分析にそのことが影響しないよう、本稿では扱わなかった。

ここで、本稿の依拠するテキストについて説明しておく。『訳文筌蹄』初編については『荻生徂徠全集』第二巻（みすず書房、一九七四年）による。また、第三章で比較対象とした岡嶋冠山『唐話類纂』については古典研究会編『唐話辭書類集』第一集（汲古書院、一九六九年、享保一〇（一七二五）年に成立した写本の転写本の影印を収録）、同『唐話纂要』については同第六集（汲古書院、一九七二年、享保元（一七一六）年刊本の影印を収録）によった。

本稿は全4章で構成される。続く第二章では、荻生徂徠にとって『訳文筌蹄』はどのような位置づけの著作であったのかについて、その成書時期や当時の社会背景、そして内容の構成を踏まえながら、検討を加える。そのうえで第三章では、『訳文筌蹄』の「俗語ニ…」という特徴的な記述で説明されている具体的な用例を網羅的に集め、当時の中国白話小説に用例を探り、さらに当時の代表的な唐話辞書『唐話纂要』などとの比較を通じて、荻生徂徠『訳文筌蹄』における唐話知識のあり方について検証を行う。さらに第四章では、『訳文筌蹄』の「俗語ニ…」という特徴的な記述に見られる唐話知識の由来と、徂徠がどのように唐話を受け入れたかについて分析を行う。そのような作業を通して、「俗語」受容の観点から、荻生徂徠における唐話の知識の由来と理解の程度を明らかにするとともに、近世の儒学者の古典漢文および当時の現代中国語に関する知識のあり方を明らかにするとともに、それがはらんでいた思想的な可能性を問うことが、本稿の目的である。

2 荻生徂徠『訳文筌蹄』の位置づけと特徴

荻生徂徠『訳文筌蹄』は、二つの点で注目に値する。一点目は、江戸時代の儒学者によつて著された早い時期の字書であるという点である。同じ時期に著された字書としては、伊藤東涯の『操觚字訣』もある。江戸時代の儒学者によつてすぐれた字書が著されるようになったのはこの時期以降のことであり、そのなかでも『訳文筌蹄』は最も広く受け入れられた字書の一つである。⁽¹⁴⁾

二点目は、『訳文筌蹄』には、『操觚字訣』など同時代の他の字書とは異なつて、唐話に関する知識が含まれているという点である。『訳文筌蹄』が刊行された当時は、唐話への注目が高まるのにつれ、唐話に関する知識も徐々に蓄積されていた時代ではあったが、岡嶋冠山の『唐話纂要』などが刊行されたのはこれより後の享保に入つてからのことであり、『訳文筌蹄』の唐話に関する知識は当時目新しいものであった。

荻生徂徠が柳沢吉保に抜擢されその儒臣になつたのは、一六九六（元禄九）年のことである。徂徠は、柳沢吉保を重用した將軍綱吉の御前で、鞍岡元昌による唐音の『大学』講義の通事をしたり、ほかの儒臣たちと唐音で儒学に関する問答をしたりしている。⁽¹⁵⁾ この時期すでに通訳をしたり問答をしたりするほどの唐話能力を持っていることから、徂徠の唐話学習は遅くともこれ以前から始まっていたことがわかる。他にも、一七〇七（宝永四）年九月には、紫雲山瑞聖寺甘露堂で、徂徠は初めて黄檗宗の僧侶である中国浙江省杭州府出身の悦峯と筆談するなど、⁽¹⁶⁾ 当時徂徠は活発に唐話学習をしていた。一七〇九（宝永六）年の綱吉の死去と吉保の失脚により、徂徠は柳沢藩邸を離れて江戸茅場町に私塾護園塾を開くが、一七一一（正徳元）年には、護園塾で唐話の研究会である「訳社」を立ち上げており、そ

ここに招請した唐話講師の一人には、岡嶋冠山がいた。『訳文筌蹄』は、このような唐話学習をしている時期に推敲され、一七一四年から一七五年にかけて出版されたのである。

『訳文筌蹄』初編が刊行された一七一四年は、荻生徂徠は四八歳で、「訳社」での学習が一定の成果をあげた時期であった。これ以降、徂徠が唐話に言及することは減っていく。このことから考えると、『訳文筌蹄』初編は、徂徠のなかでは、自分の唐話学習の集大成のようなものであった可能性が高い。以下では、徂徠の『訳文筌蹄』を、彼の唐話学習の到達点であり、その次の段階の応用（明律研究）に向かつていく転換点でもあったと位置づける立場から、考察を進めていきたい。

さて、『訳文筌蹄』初編の巻首には、荻生徂徠が学問の方法を論じた「題言十則」が置かれており、そのなかでは「崎陽之学」（唐話学）のことも論じられている。まず第一則では、「（憲廟（＝五代將軍綱吉）学を好み、…而も能く海舶来の和訓無きを読む者を求むるに、寥寥乎として幾くも無し」と、当時の好学の風潮と、それに追いつかない学者の中国語知識との矛盾について述べられている。長崎などから日本に入ってくる中国語の書物を訓点無しには読めない学者が多いことを徂徠が問題視していた様子がうかがえる。このような認識が『訳文筌蹄』成立の背景にはあった。

そして、中国語を学習・理解する方法について、徂徠は、護國塾の「学問の法」として、第五則において次のように述べている。「予れ嘗て蒙生の為に学問の法を定む。先づ崎陽之学を為し、教ふるに俗語を以てし、誦するに華音を以てし、訳するに此の方の俚語を以てして、絶して和訓廻環の読みを作さしめず」。徂徠はここで、「崎陽の学」（唐話学）と「和訓廻環の読み」（漢文訓読）と「訳」（現代日本語訳）との関係について述べている。中国語のテキストを正確に読解するには、従来の漢文訓読は不十分であり、これに頼ってはならない。そのかわり「崎陽の学」を

実践し「華音を以て」音読するとともに、現代日本語を用いてわかりやすく解釈することにより、その意味を理解すべきである。これが護國塾の「学問の法」であった。江戸時代に入って約百年が経ち、好学の風潮が盛んになるなか、中国語に対する理解の水準も高まり、中国語と日本語は別の言語なのだという認識にはじめてはつきりと立脚して、新たな学問方法を提起したのが、『訳文筌蹄』だったのである。

『訳文筌蹄』初編は、いま分析した「題言十則」等と、本文部分をなす字書六卷からなる。字書の部分では、同訓異義字および和訓が不的確な文字を「虚字」（動詞）・「半虚字」（形容詞）を中心におよそ一六七五字以上取り上げ、その意味の違いを具体的に説明している。たとえば、巻六では、「誤錯過」の三文字について、和訓では同じく「アヤマル」と訓ぜられるが、「誤」は「シヅコナイ」、「錯」は「齒入レチガヒテアル」、そして「過」は「悪ノ心ナキ」という意味であると弁別している。そしてこの例でとくに注目に値するのは、「錯」の項目に、「俗語ニハ誤字ノ代ニ皆錯ノ字ヲ用ユ」という「俗語」の使い方の説明が含まれている点である。

このように、『訳文筌蹄』では、同訓異義字の意味を弁別する際に、「俗語」（唐話）の知識が活用されている。このような荻生徂徠の唐話知識は、どこから得られたもののだろうか。また、それはどれくらい確かなものだったのだろうか。次章においては、これらの点について具体的に検討する。

3 『訳文筌蹄』における「俗語」の解説例とその分析

まずは、【表1】【表2】をご覧いただきたい。これらは、『訳文筌蹄』における「俗語ニ…」という解説の例を、すべてまとめたものである。ここでいう「俗語」とは、古典漢文とは区別される、当時の現代中国語の話し言葉、す

【表1】『訳文箋蹄』における「俗語」解説例（熟語の用例を含むもの）

漢字	原文内容
閑	俗語ニ空閑ハヒマナルコトナリ。
静	俗語ニサビシキコトヲ冷靜トイフ。
動	俗語ノ動不動ハゼビニト云フ意ナリ。是モ動輒ヨリ轉來レリ。
騒	俗語ニハ淫人ノ風流ナルヲ風騒トイヘリ。
利	俗語ニハスサマジク甚シキコトヲ利害トイフ。
保	俗語ニウケアフコトヲ保トイフ。保任ト連用ス、保戸保人皆ウケアヒノモノナリ。
強	俗語ニマサルトヨム。強似阿哥ハアヒマサリナリ。
全完	俗語ニハ事ヲシマフコトヲ完了ト云。
好	俗語ニ好歹ト連用ス。
兇	俗語ニ大好大熱大風好不大熱好不大風皆大熱大風ヲツヨク言フ詞ナリ。
装	俗語ニ打扮装扮ト云フハ衣服ノヤウス出立ナリ。
粧	俗語ニ粧扮ト云詞アリ。装扮トカクヲ普通スルユヘ、粧扮トモカケリ。
文	俗語ニハキヤシナルコトヲ斯文ト云フ。又、轉用シテ文字ノコトヲ云フ。
明	月明ハ月ノアカリナリ。俗語ニハ月亮ト云フ。
淨	俗語ニ乾淨ト云ハ、モノハキレイサツハシタト云フ意ナリ。
熟	俗語ニ熟腸ト云フハ眞實ノ心入レヲ云フ。
精	俗語ニ成精的ト云ハモノノ年月ヲ経テバケモノニナリタルコトナリ。
粗	俗語ニ精細物件トハ段物ルイノヨキ道具ナリ。粗重東西ハアラ道具ナリ。心粗トハ心ノ細密ニナキコトナリ。庸粗トハキメノアラキコトナリ。
緊	俗語ニ不要緊ト云ハサマデア入モノナキコトセンモノナキコトナリ。要緊ハセン入ナルコトナリ。好得緊ハキツクヨキコト。冷得緊ハキツクサムキコト。畢竟得緊ノ二字助語ノ如シ。
遲	人ニ物ヲワタスコトヲ遅與ス遲過スト云フ。俗語ナリ。
鬆	俗語ニ緊ノ反對ニテ、細ナドナルムルコトヲ鬆ト云フ。
等	俗語ニハ們字ヲ用ユ、我們ナリ。
當	俗語ニ事ヲスルコトヲ勾當ト云フ。
兇	是モ俗語ナリ。兇銀字ハ兩替ノコトナリ。
怪	俗語ニハ噴怪ト連用ス。又、怪他ハカレヲイカルナリ。勿怪ハイカルコトナカレト云フコトナリ。
合	合同ハワリフノコトナリ。周禮ニ出ツ。俗語ニモ用ユ。
並併	俗語ニ打併ト云ビ、併了他ト云フ。結果ト同シトニテ、ウチ殺テノクルコトナリ。
休	俗語ニ罷休ト連用シテ、ヤメヨシニセヨト云フコトナリ。俗語ニ休言休説ナド皆勿レノ意味ナリ。
果	俗語ニ果然是好山ナト云フハ疑ヒモナクト云フホドノ意ナリ。
敢	俗語ニ不敢豈敢不敢當ナド、下ニ何モツツケズツテ文字ニ用ル時ハ謙退ノ辭ナリ。
行	俗語ニモノハ才覺ナルコトヲ行ト云フ。
破	破瓜ハ水アゲナリ。俗語ニハ梳弄ナリ。
害	俗語ニ害病ハ病ヲワづラフコトナリ。
消	俗語ノ助語ニモチユトヨム。何消不消ノイナリ。須字ノ意ナリ。
張(展)	俗語ニハ了簡ノコトヲ云フ。沒主張トハ不了簡ナルコトナリ。
起作興	俗語ニハ起身ト云フ。
小	俗語ニ小の小可ト云、非同小可ト云ハ、軽小ナルコトニテ、ナキト云フ意ナリ。
備纒	俗語ニ方纒纒皆適來ノ義ニ用ユ。イマト誤ス。
長	俗語ニ不長進トハワトナシクナキ人カラライフ。
高	俗語ニ藝術ノ進ムコトヲ高起來トイフ。高手ハ上手ナリ。
低	俗語ニ藝術ノ下ルコトヲ低起來トイフ。
溜	俗語ニ溜去ト云フハ、蛇ナドノスイト云フテコケユクヲ云フ。
張(貼)	俗語ニハフンベツノコトヲ主張ト云フ。ムフンベツナルコトヲ沒主張ト云フ。
快快據	俗語ニハハヤキコトヲ快ト云フ。速字ノ如シ。箸ヲ快子ト云フ。
思	俗語ニ相思ト云ハ戀ノコトナリ。
憶	俗語ニハ専ラ記字ヲ覺ユルコトニ用ユ。記不得オボヘラレヌ記得オボヘテオル。
念	念頭ノコトヲモ又心ニ念頭ノウカムコトヲモイフ。又思慕ノ義ニモ用ユ。唐宋間ノ俗語ナリ。
想	俗語ニハオモヒ出スヲ想出来、ヲモヒ出サレヌヲ想不出。コノ時ハ憶ノ字ニ似タリ。カクオモフヲ這樣想。
憐	六朝ノ俗語ニ情人ヲ憐ト云フ。
感	俗語ニハ感激ヲ感荷ノ意ニ用ユ。
喜	俗語ニ有喜ト云フハ婦人ノ孕ムコトナリ。
懽歡躑	俗語ニ歡喜ト連用シテ、喜字ノ義ナレトモ字書ニ喜樂也ト注シタル字ナリ。
慣	俗語ニキナレタルセニテレナシタルクセニテト云フ時ニ慣慣慣看ナト、用ユ。助語ニ似タリ。
窺傲	俗語ニハ學字ヲマネスルコトニ用ユ。學好ヨキマネスルナリ。学ダアシキマネスルナリ。
窺	俗語ノ風流話ニハオモヒ人ヲ窺家トイフ。
忿	不字ハ助語ニテ、俗語ツヨク熱スルヲ好不熱、ツヨク冷ルヲ好不冷ト云フカ如シ。
怖	畏字ト同義ナリ。俗語字ナリ。後世ノ書ニアリ、今俗語ニハアマリ用ヒス。怖小兒。
會	會得領會解會不會得等ミナ合点スルト云フホドノ語ナリ。俗語ナリ。
筭	俗語ニ數ノ内ニ入ルヲ筭得ト云ビ、數ノ内ヘ入ラヌヲ筭不得ト云フ。

【表2】『訳文筌蹄』における「俗語」解説例（熟語の用例を含まないもの）

漢字	原文内容
速	俗語ニハ快慢ノ字ヲ用ヒテ遲速ノ字ヲ用ヒズ。
饒	俗語ニユルストヨム。
軟	俗語ニ多ク柔字ヲ用ヒズ。軟字ヲ用ユ。
硬	軟ノ對ナリ。俗語ニ多用ユ。堅固ニシテヤフレヌ意ナシ。
稠	俗語ニ粥ヤ糊ヤ或ハ痰唾等ノコキヲ稠トイフ。
善	俗語ニ是ト云カ如シ。
佳	佳字ハ雅語ナリ。好字ハ俗語ナリ。
紋	俗語ニハ紋ノコトヲ花ト云フ。
暗誦	闇誦ハ書ニ對セズシテソラニヨムコトナリ。背誦トモイフ。俗語ニハ背トバカリ云フ。
停	俗語ニヒトシトヨムモノハ等分ナルコトナリ
派	俗語ニワリツクルコトナリ。經濟ノ書ニ多キ語ナリ。
俵	是モ俗語ニモノヲ分散スルコトナリ。
寫	俗語ニハ字ヲカクコトヲ云フ。書スルコトナリ。
抄	俗語ニハウツスコトヲ云フ。
常恒庸	常ノ字ハ俗語ニ用ヒテ恒字ハ俗語ニ用ヒザルユヘナリ。
窮	俗語ニハ貧ノコトヲ窮ト云フ。
訂	俗語ニハ書物ヲトヂルコトヲ訂ストイフ。
些	俗語ナリ。些少ノ義ナリ。又俗語ニ一種無義ノ些アリ。
調	俗語ニハ此字ハカリ用ユ。
上	俗語ニモ用ユ。
降下	俗語ニ輕ク助字ノ如ク用ユルコトアリ。
疼痛	疼字ハ俗語ニ用ユルナリ。
弄	俗語ニハアチラヘトリマハシコチラヘトリマハシスルコトヲ弄ト云フ。
怕	俗語ニ恐字ト同義ナリ。然レトモ義廣シ。俗語ニハ此一字ニテ大形スムナリ。
錯	俗語ニハ誤字ノ代ニ替錯ノ字ヲ用ユ。
羸	俗語ニ用ユ。

なわち唐話のことである。【表1】は、たとえば、「閑」について、「俗語ニ空閑ハヒマナルコトナリ」とあるように、「俗語ニ…」という解説のうちに熟語の用例を含むものである。【表2】は、たとえば、「速」について、「俗語ニハ快慢ノ字ヲ用ヒテ遲速ノ字ヲ用ヒズ」とあるように、単独の漢字の字義のみを説明して、熟語の用例を含まないものである。『訳文筌蹄』には、「俗語ニ…」という表現を用いた解説が、全部で八五ヶ所あり、このうち、【表1】にまとめた、解説のうちに熟語の用例を含むものが五九ヶ所、【表2】にまとめた、熟語の用例を含まないものが二六ヶ所ある。【表2】と関わってあらかじめ指摘しておくくと、当時の唐語字書は、二字以上の単語について説明するのが通常であり、単独の漢字の字義を説明するものは少ない⁽¹⁷⁾。二六ヶ所も単独の漢字の「俗語」における用法が説明されている点は、『訳文筌蹄』の特徴の一つである。

ところで、徂徠は、【表1】【表2】に見られるような「俗語」知識をどこから得たのであるうか。この点と関わって参考になるのは、『徂徠集』卷十所収の「送野生之洛序」である。徂徠は、そこにおいて、自分の華音の師友およびその教材につ

いて、「又た搦謙野先生（＝中野搦謙）を得て以て之を友とす。……其の学は大氏『水滸』『西遊』『西廂』『明月』の類を主とするのみ」と述べている。⁽¹⁸⁾ここからわかるように、徂徠の周辺では、『水滸伝』『西遊記』『西廂記』『明月記』など元明の白話小説が教科書として用いられていた。このことを踏まえると、徂徠の「俗語」知識は、このような白話小説にもとづいている可能性が高いと考えられる。

【表3】は、【表1】にまとめた「俗語二：」という解説のうちに引かれている熟語について、その用例を検索した結果をまとめたものである。検索にあたっては、中国知网 (cnki.net) の国学宝典数据库⁽¹⁹⁾などを用いて、可能な限り幅広く用例を探した。そのような作業を行ってみると、さまざまな文献のうちに非常にたくさん用例が見つかるが、その検索結果を整理してみると、明代に刊行され広く読まれた白話小説を中心に、いくつかとくにヒット数の多い作品があることがわかる。【表3】は、そのような作品を上欄に掲げ、そこでの用例数と具体的な用例をまとめたものである。用例を挙げるにあたっては、原則として、最もヒット数の多い文献から、徂徠の解説している意味で用いられていることがわかる用例を一例のみを挙げた。なお、【表3】の数字は、当該語彙の検索結果であり、徂徠の解説と異なる意味での用例もカウントされていて、その限りで厳密さに欠ける部分もあるが、およその傾向はこの【表3】から読み取れるはずである。（用例自体は見つかるものの、徂徠の解説する意味での用例が見つからない熟語については、※を付した）。

【表1】と【表3】を対照すればわかるように、「俗語二：」という解説のうちに引かれている熟語の用例を検出できたのは、全五九件のうちの四八件である。この四八の熟語の用例がしばしば見出される文献として、【表3】には、『喻世明言』『警世通言』『醒世恒言』『初刻拍案惊奇』『二刻拍案惊奇』『三刻拍案惊奇』『西廂記』『三国演義』『水滸伝』『西游记』を挙げた。いずれも明代に刊行され広く読まれた白話小説である。このうち、『三国演義』は『通俗三

【表3】徂徠の「俗語」知識と白話小説等における用例との対照表

漢字	熟語	書名とヒット数										用例原文(1例のみ挙例)
		喻世明言	警世通言	醒世恒言	初刻拍案惊奇	二刻拍案惊奇	西国演义	三國演義	水滸傳	西遊記		
閑	空闲	4	0	6	0	3	0	0	0	1	0	养娘常叫出外边杂差杂使，不容他一刻空闲。(《醒世恒言》第2卷)
静	冷静	3	3	3	2	2	0	0	0	0	0	只有牙婆是穿房入户的，女眷们怕冷静时，十个九个到要扳他来往。(《喻世明言》第1卷)
動	動不動*	2	4	3	10	5	0	0	0	1	2	然见老儿说话坚执，动不动哭个不住，又不肯饮食，恐怕迷了他万一做出事来。(《初刻拍案惊奇》第6卷)
騒	風騒	0	2	2	2	4	0	0	0	1	0	庆大郎此时把个身子拴在半天里了，好不风騒。(《二刻拍案惊奇》第11卷)
利	利害	19	16	48	17	21	2	3	23	25	36	先叙了儿子病势如何的利害，次叙着朱亲家夫妻如何的抱怨。(《醒世恒言》第9卷)
保	保人	0	0	0	2	1	0	0	1	1	1	如此说，要你做个大大保人，当有重酬。(《初刻拍案惊奇》第1卷)
強	強似	8	4	4	0	3	1	2	1	20	14	杨志道：“好汉既然认得酒家，便还了俺行李，更強似请吃酒。”(《水浒传》第12回)
全完	完了	11	11	25	30	22	6	0	0	0	3	索性等他败完了，倒有个住场，所以再不去劝他。(《初刻拍案惊奇》第15卷)
好	好夕	12	10	22	36	44	8	2	5	24	68	老孙只管师父好夕，你与沙僧专管行李马匹。(《西游记》第23回)
保	保人	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4	悟空见他凶猛，即使身外身法，掣一把毫毛丢在口中嚼碎，望空喷去。(《西游记》第2回)
裝	裝扮	2	3	5	2	2	0	0	0	3	3	劝公教勤婆将她媳妇装扮起来，却请林公进房。(《醒世恒言》第5卷)
文	斯文*	3	6	3	6	9	1	1	0	0	11	大叟收了金箍棒，整肃衣裳，扭扭作个斯文气象。(《西游记》第59回)
月	月亮*	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	何道就乘此机会，走到女墙边月亮去处，假意解手，拿起那物来。(《初刻拍案惊奇》第31卷)
淨	乾淨	14	14	41	25	18	5	0	0	19	48	八戒道：“哥哥，你要图干净，只作我下水。”(《西游记》第22回)
熱	熱腸	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	王太道：“相公一片热肠救你，那指望报答？但愿你去改行从善，莫负相公起死回生之德。”(《醒世恒言》第30卷)
精	成精的	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4	那虎狼彪豹子，马鹿山羊，都是成精的妖怪。(《西游记》第89回)
緊	不要緊	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	万事多不要紧，只愿他易长易成。(《初刻拍案惊奇》第13卷)
遇	遇過	0	0	2	3	1	0	0	0	4	0	到得他山寨里面，见邓龙时，把子拽脱了活结头，小人便过禅杖与师父。(《水浒传》第17回)
鬆	鬆了	3	1	2	5	8	0	0	0	3	7	这不难，等我先把帘子上的系带解了。(《二刻拍案惊奇》第14卷)
等	我們	44	33	94	120	109	39	0	0	222	440	禄星道：“我们一向久阔尊颜，有失恭敬，今因孙大圣搅扰仙山，特来相见。”(《西游记》第26回)
當	匀當	7	6	36	22	35	3	2	0	48	29	只得母子二人逃上延安府去，投托老种经略相公处匀当。(《水浒传》第2回)
恰	啣恰	4	7	2	5	4	1	0	0	8	2	我说出来，叔叔不要嚷。(《警世通言》第31回)
合	合同	0	0	0	38	2	1	0	0	0	6	有颜老客长做主，写个合同文书，好成交易。(《初刻拍案惊奇》第1卷)
休	罷休	5	3	9	1	0	1	2	0	15	2	我猜着你两个多时不见，一定要早睡，收拾了罢体。(《水浒传》第21回)
果	果然	62	59	111	134	172	37	6	60	61	198	长老，你幸此间收得个好徒，甚喜甚喜，此人果然去得。(《西游记》第14回)
敢	豈敢	6	15	27	7	12	0	2	11	5	7	佛道：“恩相在上，侍坐已是僭安，岂敢抗礼？”(《醒世恒言》第30卷)
破	在行	1	2	4	12	16	3	0	1	3	12	买的多不在行，伸伸舌，摇摇头，恐怕做错了生意，折了重本。(《二刻拍案惊奇》第1卷)
行	梳弄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	偶然有个金二员外，大富之家，情愿出三百两银子，梳弄美娘。(《醒世恒言》第1卷)
害	害病	2	3	2	2	1	0	0	0	3	2	公子说：“我若南京再娶家小，五黄六月害病死了我。”(《警世通言》第24卷)
消	何消	2	1	10	4	4	2	0	0	5	0	小姐何消行此大礼？有话请起来说。(《醒世恒言》第36卷)
起作興	起身	69	81	177	56	78	31	0	42	174	66	今早已牌时分，不见起身，上楼看时，已杀在被中。(《醒世恒言》第16卷)
小	非同小可	4	1	8	8	10	0	0	0	14	0	正是应谣言的人，非同小可！(《水浒传》第39回)
儼	適儼	6	19	19	38	24	13	3	2	0	28	久闻他家娘子，生得标致，适才同你出来，掩在门里的，想正是他了。(《初刻拍案惊奇》第6卷)
長	不長進	0	1	2	5	2	2	0	0	1	1	元来那厮子虽数上了三十多个年头，十分的不长进。(《初刻拍案惊奇》第20卷)
高	高手	2	2	1	2	13	0	0	0	5	0	自此日着日高，是村中有名会下棋的高手，先前曾饶过国能儿子的，后来多反爱国能饶了，还下不得两平。(《二刻拍案惊奇》第2卷)
張(貼)	主張	7	6	0	14	29	3	3	6	31	10	寨中头领主张不定，请兄长军师早出兵回来，且解山寨之难。(《水浒传》第64回)
思	相思	15	12	7	11	6	0	23	0	3	3	晋天下害相思的，不似你这般样鬼。(《西国记》第25回)
憶	记得	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	童子曰：“我记不得许多名字。”(《三國演義》第37回)
念	念頭	10	3	25	17	23	2	0	0	9	0	若是张贡生闻得此言，转了念头，还是老大的造化。(《二刻拍案惊奇》第4卷)
憐	情人	6	3	4	2	4	0	2	0	0	0	情人自怜情人，犹才人自怜才人，若不关痛痒，必非臭味。(《喻世明言》第12卷)
感	感激	6	8	14	17	16	1	0	0	6	13	王生见吕大为他辩诬，俱各致个不安，互相感激。(《初刻拍案惊奇》第11卷)
喜	有喜	0	3	2	1	3	0	1	3	1	1	就有个把有手段的付道：“象是有喜的脉气。”(《初刻拍案惊奇》第20卷)
懽歡	歡喜	60	49	85	71	61	15	1	10	71	168	那菩萨闻得此言，满心欢喜。(《西游记》第8回)
做	學好	3	3	6	6	8	0	0	0	1	1	相公日前训诫小人，也只是要小人学好。(《二刻拍案惊奇》第27卷)
冤	冤家	10	67	14	48	19	1	3	0	4	8	有分撞着五百年前夙世的冤家，双双受到国家刑法。(《警世通言》第13卷)
忿	不好	3	1	4	2	2	1	0	0	0	0	只不听汪朝奉来，斜坐灯前，心里好不耐！(《三刻拍案惊奇》第6回)
會	會得	10	5	11	11	10	6	3	1	7	8	也会得使人喜，也会得使人怒。(《初刻拍案惊奇》第20卷)
算	算得	1	3	3	7	8	0	0	0	0	0	偶尔戏言，并无什么文书契约，怎算得真？(《二刻拍案惊奇》第2卷)

*印は、徂徠の解説(【表1】参照)と実際の用例の意味がずれているもの。

『国志』というタイトルで一六八九～一七〇二年に、『水滸伝』は『通俗忠義水滸伝』というタイトルで一七五七年に、『西游記』は『通俗西遊記』というタイトルで一七五八～一八三二年に、『醒世恒言』は『通俗醒世恒言』というタイトルで一七八九年に、翻訳本が出版されているので、⁽²⁰⁾ 徂徠は当時のそのような動向のなかでこれらの本を翻訳した学者たちにむしろ先んじて唐話知識を身につけていたと言つてよい。

ここで最も重要なのは、徂徠の唐話知識の正確性がどの程度かということである。【表1】と【表3】を対照してみると、用例を検出できた四九件の熟語のうち、徂徠の字義の解説に明らかに問題があると感ぜられるのは【表3】で※印を付した三件のみであり（この三件については後述）、『訳文筌蹄』における徂徠の「俗語」の解説はきわめて正確性が高いといえる。念のため、いくつか例を挙げておこう。

徂徠の説明「俗語ニ空閑ハヒマナルコトナリ」

『醒世恒言』における用例「養娘常叫出外辺雑差杂使、不容他一刻空闲」（女中はしよっちゅう表へ呼び出されてあれこれこきつかわれ、いつときの暇も与えられない⁽²¹⁾）。

徂徠の説明「俗語ニサビシキコトヲ冷静トイフ」

『諭世明言』における用例「只有牙婆是穿房入戸的、女眷多們怕冷静時、十个九个到要扳他来往」（周旋婆だけはこの家へでもめぐりこんで行くので、さびしさをかこっている奥さんたちは十中八九ひっかけて付きあいをはじめめるものがある⁽²²⁾）。

以上のように、「俗語」についての徂徠の説明は、当時の用例に照らして、おおむね正確であるといえるが、たとえば、次のような例を参照すると、徂徠の説明は簡略すぎてその語彙の用法を十分にカバーできていないこともわかる。

徂徠の説明「俗語ニ事ヲスルコトヲ勾當ト云フ」

『水滸伝』の用例(2) 「全不曉得路途上の勾當艰难！」(道中がどんなに危ないかてんでわかっちゃいないんだ)⁽²³⁾。

ここでは、「途上の勾當」は、「道中で起こるであろう事柄」といった意味で用いられているが、徂徠の「事ヲスルト」といった簡略な説明では、このような実際の多様な用例は十分に説明しきれないことがわかる。この限りでは、『訳文筌蹄』の「俗語」解説は不十分であったともいえるが、次に述べるように、同じような限界は当時の唐話辞書一般に指摘できることであり、当時の水準からすると徂徠は唐話学者たちに匹敵する知識を持っていたといえる。

次に、訳社での唐話学習の成果が反映されているとされる『唐話類纂』(写本)、当時の唐話辞書として最も有名な『唐話纂要』(享保元(一七二六)年刊)の解説と『訳文筌蹄』の解説との比較を行ってみよう。これらはいずれも、唐話学者で訳社の講師を務めていた岡嶋冠山の著作である。当然のことながら徂徠と冠山の間には親交があり、『唐話類纂』の巻頭には荻生徂徠をはじめとする訳社の関係者の名前も列挙されている。

『訳文筌蹄』の「俗語ニ…」というかたちで説明されている内容と重なる例は、『唐話類纂』が一三ヶ所(月亮・何消・利害・冷靜・斯文・主張・有喜・冤家・梳弄・箸子・動不動・好得緊・兎銀子)、『唐話纂要』が一〇ヶ所(起身・空閑・冷靜・斯文・我們・利害・月亮・動不動・不長進・箸子)である。重なる例は、いずれの字書においてもごく一部にすぎないが、三ヶ所(「月亮」「有喜」「動不動」)を除いて、両者の説明は一致している。

ここでは、両者の説明が食い違っている三ヶ所について検討してみよう。まずは「月亮」について見てみると、『唐話類纂』『唐話纂要』はいずれも「ツキノヨ」と説明しており、『訳文筌蹄』は「月ノアカリナリ」と説明している。しかし、【表3】で挙げた検索結果でも、「月亮」が名詞として使われている用例はなく、『唐話類纂』『唐話纂要』の説明も『訳文筌蹄』の説明も間違っているといえる。²⁴⁾では徂徠はなぜこのような間違いを犯してしまったのであろうか。ここで、「月亮」という語彙の用例について調べてみると、唐代の李益の詩「奉酬崔員外副使攜琴宿使院見示」のなかの「庭木已衰空月亮、城砧自急對霜繁」が早い時期の用例として見つかる。ここでの「月亮」は「月」と「亮」が主語・述語の関係になっており、【表3】に挙げた用例と同様、「月が明るい」という意味である。漢詩、とりわけ唐詩に詳しく見た徂徠は、唐詩の用例に引つ張られて間違った説明をしてしまった可能性が高い。

次に「有喜」について見てみると、徂徠は「俗語ニ有喜ト云フハ婦人ノ孕ムコトナリ」と説明しているのに対し、冠山は『唐話類纂』において「ヨロコヒヲシタ」と説明している。「有喜」という語彙を検索してみると、当時の白話小説のうちに、どちらの意味の用例も見出すことができるため、徂徠も冠山も間違っていないが、どちらの説明も不十分であったといえる。【表3】の「有喜」の用例全一五例のうち、徂徠の説明する意味での用例は、表中に引用した一例のみであった。

最後に、「動不動」について見てみると、徂徠は「ゼヒニ」という意味であると説明しているが、この熟語は当時「ややもすれば」という意味で使われており、徂徠の説明は明らかに間違っている。それに対して、冠山は、「ヤ、モスレハ」という意味であると正確に説明している。

いま見たのは、徂徠の説明と冠山の説明が食い違っていて徂徠の説明が誤っているケースであるが、既述の「月亮」「動不動」に加えて徂徠の説明が間違っているもう一つのケース（「斯文」）について検討してみると、非常に興

味深いことに気づかされる。徂徠は、「斯文」について、「キヤシヤ」（華奢）の意であると説明しているが、この説明は、原義から遠ざかりすぎていて、その意味での用例は見出しがたい。興味深いのは、『唐話類纂』も『唐話類纂』も「斯文」について「キヤシヤ」と説明している点で、徂徠は冠山の説明を踏襲していたことがわかるのである。

この観点から【表1】に整理した徂徠の説明を読み返してみると、次の個所が注目される。徂徠は、「快怵慊」字の解説において、「俗語ニ…箸ヲ快子ト云フ」と説明しており、「箸子」の「箸」字は「快」と同じであると考えていることがわかる。しかし、中国語には「快子」という語彙はなく、この語彙を当時の白話小説のうちに検索してみても一例もヒットしない。したがってこの説明は間違いなのであるが、ではなぜ徂徠はこのような間違いを犯してしまったのであるのか。ここで冠山の著作を参照してみると、『唐話類纂』も『唐話類纂』も「箸子」を「ハシ」と説明しており、さらに『唐話類纂』は「箸子」の次に「快子」という項目を設けてこれについても「ハシ」と説明している。つまり、徂徠が「箸ヲ快子ト云フ」と間違った説明をしてしまったのは、冠山の影響によるのである。この事例は、冠山の誤りまで踏襲してしまうくらい徂徠の唐話知識は冠山に影響されていたことを示している。

「斯文」や「快子」の説明は特殊な事例としてしばらく措くとすれば、総じて荻生徂徠の『訳文筌蹄』に見られる唐話知識には訳社の講師岡嶋冠山から学んだ内容が豊富に含まれており、そのことが同書の水準を高めていたといえる。

4 「俗語」知識から見た荻生徂徠の言語観と徂徠学

すでに略述したように、荻生徂徠の唐話知識にはいくつかの背景がある。

まず、中国から渡来した黄檗僧が多くの唐話知識を日本にもたらしたことである。荻生徂徠を召し抱えた柳沢吉保は、とくに黄檗宗と親密であり、黄檗宗に入道参禅し、徂徠と黄檗僧との交流の契機をなした。これは早くも一六九二（元禄五）年に吉保が黄檗僧の高泉性激に法要を依頼したことからはじまっている。つまり、一六九六（元禄九）年に徂徠が吉保に召し抱えられたときにはすでに吉保の周りには多くの黄檗僧がいたのである。当時徂徠が黄檗僧と交流した記録として残されているものに、一六八六（貞享三）年に来日した悦峯と一七〇七（宝永四）年に筆談した記録などがある。そこには徂徠が熱心に悦峯に中国語について尋ねる様子が残されている。さらにその筆談で徂徠が使っている語彙には、「小的」「豈」など、『訳文筌蹄』の「俗語」解説で言及されている唐話知識も含まれていることから、記録が少なく詳細は知りえないものの、徂徠の唐話知識の一部は、このように黄檗僧などとの交流から直接得たものであったと考えられる。

次に、前章で『訳文筌蹄』との比較で取り上げた『唐話類纂』『唐話纂要』などの著者岡嶋冠山も徂徠の唐話知識と大きくかかわっている。冠山は長崎出身で、唐通事とも深い関わりを持ち、唐話に精通していた人物で、一七〇一（元禄一四）年に長崎を出て江戸に向かった。冠山は「徂翁華音の師なり」⁽²⁵⁾とされる人物で、一七一（正徳元）年に荻生徂徠に招かれ訳社の講師となり、江戸の儒学者の唐話学習に大いに貢献した。ちょうど『訳文筌蹄』初編の刊行の準備が進められていた時期に、岡嶋冠山が訳社で講師をしていたのである。岡嶋冠山に先立って、鞍岡玄昌や中野搗謙など唐話に長じた人物が徂徠の周りにいたことは、すでに述べた通りである（注14・17参照）。

ところで、岡嶋冠山は、唐話学者であるだけでなく、白話小説の紹介者でもあった。現在の研究においては、岡嶋冠山は、唐話学者としてよりもむしろ、白話小説を近世日本に紹介し普及させた人物として注目されている。⁽²⁶⁾この点は、徂徠の唐話知識のある部分が白話小説に由来することになった理由であると想定できる。このように、徂徠は唐

話を学ぶうえでとても恵まれた環境にあったのである。

徂徠の「俗語」知識の水準についてはすでに第三章でみたので、ここではその「俗語」知識に対する態度について考察することにより、徂徠の言語観、さらにはのちに成立する徂徠学への関わりについて考えておきたい。繰り返し言えば、徂徠の『訳文筌蹄』は、日本人にとっては曖昧な同訓異義字の意味の違いをはっきりさせることを意図した字書である。そこでは、一字ごとに説明が加えられていて、形式としては（唐話の字書ではなく）伝統的な字書に近い。この字書で、徂徠は、字義を厳密に弁別し中国語を日本語に正確に訳すことの重要性を強調した。そうだとすると、この字書において、徂徠が「俗語ニ…」というかたちで書き込んだ唐話知識の説明は、一見すると、余分な知識であるように見える。しかし、第三章でみた徂徠の唐話知識の正確さからすれば、これがただの「余技」（前引の六角恒広の言葉）でなかったことは明らかである。

『訳文筌蹄』は、一つ一つの漢字について説明する古典的な中国語の辞書と、主に二字語以上の長さの語彙を説明する唐話字書とのあいだに成立した、日本人学習者のための同訓異義字書である。この『訳文筌蹄』の「俗語ニ…」という解説の部分で、単独の漢字について俗語の使い方を説明している例は、全体の三分の一を占めている。当時の唐話辞書はほぼ二字語からはじまるのに対して、『訳文筌蹄』のこの独特と言える現象は、徂徠の言語観を示している。同訓異義字の意味の弁別を目的とする『訳文筌蹄』においては、「俗語」の知識は、付加的なものである。しかし、徂徠にとってこの付加的な情報は、けっして余分なものではなく、現実に運用されている言葉の一部であり、その限りで、その言葉の意味の重要な一部であった。徂徠は、同訓異義字の意味を弁別するに際し、同時代の中国で現実に運用されている俗語の意味をも含めて示すことで、その字義を総合的に捉えることができると考えていたのである。

このように、徂徠は、言語に対して総合的な関心を抱いており、なかでもとくに現在実際に使われている唐語に強い関心を持ち、その理解に熱心に取り込んだ。すでに紹介したように、武内真弓は、荻生徂徠の唐語研究は「中国の古典の研究に利用しようという目的であった」という立場をとっているが（注3参照）、本稿で紹介した『訳文筌蹄』に見られる唐語知識が中国古典の研究に役立つものであったとは考えられない。荻生徂徠の中国語への関心は、中国古典の研究に従属するだけのものではなかったはずである。

ここでもう一つ注目したいのは、徂徠学成立前後に始まる明律の研究である。徂徠学は享保初年に成立し、その思想は徂徠の五十歳頃以降の著作である『弁道』『弁名』『論語徴』『答問書』『太平策』『政談』などにまとめられている。そこに見える徂徠の考えによると、道とはすなわち「先王の道」であり、それは客観的かつ具体的なものである。⁽²⁷⁾ 彼によると、道とは先王の遺した「礼楽刑政」という制度文物であり、彼は古代中国の聖人が建てた制度に強い関心を抱いていた。しかし、彼の制度への関心が、古代中国の制度にとどまるものでなかったことは、次の引用から明らかである。徂徠は、『太平策』において、次のように述べている。

大量ノ人、飛耳長目ノ道ヲ以テ、古ノ聖人ノ制度ト、漢唐宋明ノ制度ト、吾国上古ノ制度ト、今日ノ制度ト、ツキ合セ見ルトキハ、昔ナクテ今アルコト、昔アリテ今ナキコト、明ラカニ知ル、故、当世ノナリカタチ見ユルナリ。⁽²⁸⁾

ここに見られるように、徂徠は、「当世ノナリカタチ」を知るためには、「古ノ聖人ノ制度」と「漢唐宋明ノ制度」と「吾国上古ノ制度」と「今日ノ制度」を「ツキ合セ見ル」必要があると考えていた。徂徠学成立後の徂徠は、中国・

日本の各時代の制度に広く関心を持つようになったのである。徂徠学の成立と護園における明律研究の開始がともに享保初年であるのは、偶然ではない。

本稿で明らかにしてきたように、徂徠は、若い頃から唐話への関心を持ち、正徳元（一七一）年には唐話の勉強会である「訳社」を組織するなどその学習を進め、『訳文筌蹄』が刊行された正徳四・五（一七一四・一五）年には、すでにかなり高い水準の唐話知識を身につけていた。本稿にとつての最後の課題は、この知識が徂徠学成立以後どのような役割を果たしたかを明らかにすることである。

この点と関わって重要なのは、享保八（一七二三）年の香国禅師宛書簡である。そこで徂徠は、次のように述べている。

大氏 明律の解き難き者は、此の方の学者 俗語を諳ぜざるに過ぎず。…不佞嘗て明律を読み、頗る工夫を費やす。後來 広く群書を搜り、明代官府中の事体に通曉するを得。而る後頭を回して以て看れば、則ち律令の書明らかなること掌を指すが如し。是れ国字解の作る所以なり。⁽²⁹⁾

徂徠は、「明律を読む」むにあたり、「頗る工夫を費」やしたと述べているが、明律を研究するために徂徠がした努力には、「広く群書を搜り、明代官府中の事体に通曉する」という制度の研究だけでなく、「俗語を諳」ずること、すなわち唐話の学習も含まれていた。ここでは、『訳文筌蹄』で言及されている俗語知識が具体的に『明律国字解』で活用されている事例を確認しておこう。

明律の原文 一聽選官吏監生人等借債與債主及保人同赴任所…⁽³⁰⁾

「保人」に関する徂徠の解説 「保人は、証人なり」

『訳文筌蹄』における「保人」の説明 「保戸保人皆ウケアヒノモノナリ」

「保人」とは、現代語でいえば、保証人のことである。『明律国字解』において、徂徠は、保証人という意味で「証人」という言葉を用いて、「保人は、証人なり」と説明している。さらにさかのぼって『訳文筌蹄』を参照してみると、「保戸保人皆ウケアヒノモノナリ」と説明されていて、その時点で徂徠がこの俗語語彙を正しく理解していたことが確認できる。表現の細部に違いはあるが、『訳文筌蹄』の俗語知識が『明律国字解』に生かされていることははっきりしているだろう。

荻生徂徠における、『訳文筌蹄』が刊行された正徳年間から、徂徠学が成立した享保年間への展開は、唐話研究会（『訳社』）から、明律研究会への展開でもあった。前者は、オープンな唐話学習会であったのに対し、後者は「条約」を結んで秘密を守ることを約したうえでなされるクローズドな同時代中国の制度の研究会であった。⁽³¹⁾このような展開の背景に、さきに引用した『太平策』の一節に見られるような制度への関心の高まりがあったことは言うまでもない。明律の研究には唐話の知識が必要であり、「訳社」の講師岡島冠山も、そこに学んだ荻生北溪も、明律の研究に関わっていくが、⁽³²⁾唐話の知識に、徂徠学成立後の制度への関心を加えた荻生徂徠は、明律研究の白眉とされる『明律国字解』を著すことになったのである。

本稿で論じてきた内容からは、江戸時代に入って約百年経つ時期の、荻生徂徠が生活する江戸社会において、好學

の風潮のなか、中国語への関心も知識の水準もどんどん高まっていった様子をうかがうことができるだろう。荻生徂徠は、そのなかで、俗語を読んだり使ったりする必要に迫られ、いち早く唐通事・黄檗僧など様々なルートを通じて唐語を学んだのみならず、その伝播にも大きく貢献した人物の一人である。

本稿が課題としたのは、その荻生徂徠における唐語の知識の由来と理解の程度を明らかにするとともに、それが徂徠学成立以後に果たした役割を明らかにすることであつた。第一～三節では、徂徠の唐語知識を『訳文筌蹄』の「俗語二……」という部分を通じて分析し、それが極めて正確性の高いものであること、さらにそのような唐語知識の由来の背景に黄檗僧や岡嶋冠山がいたことなどを指摘した。そして、第四節では、そのような徂徠の唐語への関心が、徂徠学成立後、明律の研究にも生かされていたことを明らかにした。徂徠の唐語への関心は、余技でも、古典研究に従属するものでもなく、制度への関心を示した徂徠学の一部と化し、同時代の中国の制度を研究するにあたり重要な役割を果たしたのである。

〔注〕

- (1) 奥村佳代子「岡嶋冠山『唐話纂要』考」『関西大学中国文学会紀要』一七号、一九九六年、一〇一頁。同『江戸時代の唐語に関する基礎研究』（関西大学東西学術研究所、二〇〇七年）も参照。
- (2) ここでいう「唐語」とは、古典漢文とは区別される、当時の現代中国語の話し言葉のことである。
- (3) 武内真弓「話されない「唐語」―荻生徂徠の唐語観―」（『中國學研究論集』三三三号、広島中国文学会、二〇一四年）は、ほぼ同時期あるいは徂徠より少し前に雨森芳洲が長崎で唐語を学んでいるが、芳洲が唐語を学んだのは対馬藩での実務の必要からであつたと指摘している。

- (4) 石崎又造『近世日本における支那俗語文学史』弘文堂書房、一九四〇年、九頁。
- (5) 吉川幸次郎『徂徠学案』(同『仁斎・徂徠・宜長』岩波書店、一九七五年)参照。
- (6) 徂徠と『六論衍義』『明律国字解』との関係については、平石直昭『荻生徂徠年譜考』(平凡社、一九八四年)参照。
- (7) 『崎陽』は長崎のこと。「崎陽之学」は、長崎の唐通事の話される中国語についての知識を指す。
- (8) 原双桂『過庭紀談』、『日本随筆大成』新装版第一期第九卷、吉川弘文館、一九七五年、一〇頁。
- (9) 六角恒広『中国語教育史の研究』東方書店、一九八八年、四〇七頁。
- (10) 前掲武内「話されない『唐話』」、八一頁。
- (11) 日本においては、前掲吉川「徂徠学案」のほか、前野直彬「徂徠と中国語および中国文学」(『日本の名著16 荻生徂徠』中央公論社、一九八三年)、黒住真「『訳文筌蹄』をめぐる」(同『近世日本社会と儒教』ペリカン社、二〇〇三年、初出は一九九五一年)、田尻佑一郎「訓読問題と古文辞学―荻生徂徠をめぐる」(中村春作他編『訓読論 東アジア漢文世界と日本語』勉誠出版、二〇〇八年)、村上雅孝「荻生徂徠とその言語の世界」(同『近世漢字文化と日本語』おうふう、二〇〇五年)、岡田袈裟男『江戸異言語接触』第二版(笠間書院、二〇〇八年)など。中国においては、劉芳亮「荻生徂徠的翻译思想」(『解放军外国语学院学报』三二卷二号、二〇〇九年)、張妍「語言学与思想史双重视域下解讀荻生徂徠『訳文筌蹄』」(『外国問題研究』二〇一八年第一卷)、張博「荻生徂徠的訓読論」(『深圳大学学报(人文社会科学版)』三三卷第二期、二〇一六年)など。
- (12) 吉川幸次郎・戸川芳郎等編『漢語文典叢書』第三卷(汲古書院、一九七九年)所収。先行研究として、武内真弓「荻生徂徠の言語観―『訳文筌蹄』初編と『国会本』の比較から」(『中国言語文化研究』一四号、佛教大学中国言語文化研究会、二〇一四年)参照。
- (13) 本稿では、漢文の資料を引用する場合は、筆者の責任で書き下して引用する。
- (14) 一七六九(明和六)年に『訳文筌蹄』初編の索引として出版された『訳文筌蹄字引』(『漢語文典叢書』第三卷、汲古書院、一九七九年)の見返しには、「方今、海内の学士、訳筌を手にはせざるは莫きなり」とある。
- (15) 前掲平石『荻生徂徠年譜考』五二頁、五六頁、一七七―一七八頁参照。鞍岡元昌は長崎の唐通事の子で、江戸に出て、柳沢吉保に召抱えられた。

- (16) 同前六三頁参照。
- (17) たとえば、『唐話類纂』では冒頭に「二字話并附一字話」が置かれているが、「一字話」に相当する内容は実際にはほとんど含まれていない。
- (18) 「送野生之洛序」については、荻生徂徠著・澤井啓一他訳注『徂徠集序類』第一巻、平凡社東洋文庫、二〇一六年、三六―五六頁参照。
- (19) このデータベースには、先秦から中華民国にいたる典籍が幅広く収録されており、収録版本などの書誌情報も詳しく紹介されている。
- (20) 三言二拍から四〇編を収める『今古奇観』は一八一四年に『通俗古今奇観』というタイトルで刊行されている。
- (21) 訳文は、抱瓮老人編・駒田信二等訳『明代短編小説選集 今古奇観』第一巻、平凡社東洋文庫、一九六五年、三五頁による。
- (22) 同前第三巻、平凡社東洋文庫、一九六六年、二〇―三頁。
- (23) 施耐庵作・駒田信二訳『水滸伝』、『中国古典文学大系』第二八巻、平凡社、一九六七年、一九一頁。
- (24) ちなみに、徂徠よりやや後の時代の中国清代の白話小説『紅樓夢』のなかでは、「月亮」は現代語と同じく「月」の意味で使われている。
- (25) 著者未詳『護園雜話』（『続日本隨筆大成』第四巻、吉川弘文館、一九七九年）参照。
- (26) 代表的な研究としては、中村綾『日本近世白話小説受容の研究』二〇一一（汲古書院）参照。なお、近世日本において白話小説がいかにかに読まれたかについては、川島優子『白話小説はどう読まれたか』（中村春作他編『統』訓読論―東アジア漢文世界の形成）勉誠出版、二〇一〇年）参照。
- (27) このような徂徠の道の捉え方が持った思想史的意味について、丸山真男『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、一九五二年）以来、膨大な研究の蓄積があるのは周知の通りであるが、この点についての検討は別稿に譲りたい。
- (28) 吉川幸次郎等編『日本思想大系』36 荻生徂徠『岩波書店、一九七三年、四七―三頁参照。
- (29) 同前、五四―五頁。
- (30) 内田智雄・日原利国校訂『明律国字解』創文社、一九六六年、七一―五頁参照。

- (31) 明律研究会の「条約」については、前掲『護園雜話』九八頁参照。
- (32) 岡島冠山の著作『唐音雅俗語類』には明律の語彙が含まれている。荻生北溪は徂徠の弟で、『明律訳』三〇巻など、明律の研究に大きく貢献した。

(大学院博士前期課程学生)

摘要

荻生徂徠《译文笈蹄》中的唐话知识

张茜

本文选取了日本江户时代的儒学家荻生徂徠（1666-1728）的中文词典著作《译文笈蹄》，通过整理其中“俗語ニ…”的部分所出现的唐话知识，尝试分析荻生徂徠的唐话知识（此处所讲的“唐话”指与古文相区别的，元明当时的白话、口语）的来源及其对当时的唐话的理解情况。通过以上的分析，进一步论证了这样的唐话知识对于徂徠的意义。

关于《译文笈蹄》，现有的先行研究多偏重于对其中体现的徂徠的言语观，例如其著名的训读否定论、华音直读论的分析研究。本文的第1-3节通过将徂徠在《译文笈蹄》中以“俗語ニ…”的形式提及的唐话词汇与其在中国元明当时的白话小说中的使用情况进行比较，发现徂徠的唐话知识正确度极高，而他的唐话知识大部分来源于来自长崎的冈岛冠山以及徂徠周边的黄檗僧等。第4节进一步论证了以上所见的徂徠对唐话的关心在徂徠学成立后，被应用于其对明律的研究。由此可见，徂徠的唐话学习并非单纯的兴趣，也非为了帮助古典汉语的理解，而是作为对中日古今制度多次显示出极强关心的徂徠学的一部分，为其对同时代的中国的制度的研究起到了重要的作用。